

グルントヴィの思想とデンマークの教育改革

Thought in N.F.S.Grundtvig and Reform of Education in Denmark

成清 美治*

Yoshiharu NARIKIYO

<要旨>

Like the Scandinavian countries, represented by Sweden, Norway, Finland and Iceland, Denmark shows the high per capita GDP, fewer corruption, enhanced social security, less income disparity as a “social welfare state”. It maintains a high level of standard of living, and is internationally recognized as “the world’s happiest country”.

This paper focuses on the work of N.F.S. Grundtvig (1783-1872), which established today’s Danish democracy and the ideological foundation of the social welfare state through “the Folkehojskole” movement, and clarifies the significance of educational reform: revision of “the Folkeskole Law” in 2014 and the vocational education reform in 2015.

Key Words : Folkehojskole、democracy、school for life、the Folkeskole Law、social welfare state

1. はじめに

国民高等学校（フォルケホイスコーレ:folkehøjskole）の創設者であり、デンマークの民主主義社会の発展に貢献した教育者・宗教家・詩人・歴史家・思想家等の肩書をもつグルントヴィ（N.F.S.Grundtvig）は、国際的にその名を轟かせた童話作家アンデルセン（Hans Christian Andersen）や哲学者キルキゴール（Søren Kierkegaard）と比較して、戦前の日本ではその名はあまり知られず、戦後20世紀になってその業績にスポットライトが当てられるようになり、多くの研究論文・著書が出版されるようになった。

ところで、デンマークをわが国に紹介したのは内村鑑三であった。彼は1911（明治44）年、東京の今井館にて「デンマルク国」（『聖書之研究』第136号に掲載）について講演した。

その概要は以下の通りである。1864年のプロイセン・オーストリアとの戦争に敗北したデンマーク国民は精神的・物質的に大いなるショックを受けた。しかし、国民はその悲惨な状況を克服し、奇跡的に農業国デンマークを建設したという話である。当時の疲弊した国土を耕し、農地拡大を行ったのが農民であり、彼等の精神的支柱になったのがグルントヴィの思想であった。1844年にはグルントヴィの思想的

影響をうけた最初のフォルケホイスコーレが開校した。

以下の各章にておいて、彼が行ったキリスト教批判、農民運動、教育改革、民主主義思想の構築、フォルケホイスコーレ、福祉国家の基礎的思想等の系譜について叙述する。そして現在、デンマークで実施されている教育改革についてもその概要について明らかにする。

2. グルントヴィの生涯と思想

（1）グルントヴィの生涯

グルントヴィは1783年9月8日、シェラン島のウズビュ教区の貧しい牧師の子として4人兄弟の末っ子として生まれた。

貧しい家庭であったが母親の愛情溢れる子育てと精力的な支援によって、彼は精神的に安定した子どもとして成長した。

彼は母親の影響で幼少期から読書に親しみ本から幾多の知識と教訓を得ることができた。彼の幼年時代の住居は両親とともに暮らすウズビュ教会に隣接する牧師館であったが、そこで教会によって扶養されていた障害を持った一人の老女から伝えられる情感あふれる歌や物語が彼の心を揺さぶり、彼女から発する言葉（方言）は彼の民衆の表現の模範となり、

* 本学客員教授

成長発達過程において大いなる影響を受けた。6歳になったグルントヴィは地元の小学校に通い始めたが、フランス革命に共鳴していた小学校の校長から政治的な影響（関心）を受けることになった。その後、1792年に以前グルントヴィ家の家庭教師をしていたユトランド半島のフェルド牧師のもとで6年間ラテン語等を学ぶことになった。同時にユラン半島の荒涼たる自然の体感と北欧神話の世界を会得することができた。その後、大学の入試に備えるため1800年に同半島の中部のオーフスのギムナジウム（高等学校）入学し、ラテン語を学んだ。しかし、この学校でのラテン語の授業は徹底した暗記・詰め込み教育で彼を憂鬱な気分させると同時にのちにこの学校での体験を「死の学校」と呼んだ。この学校体験がフォルケホイスコーレ運動を起こすきっかけとなった。

そして、1800年に無事コペンハーゲン大学神学部に入學したグルントヴィは日夜読書に励みヨーロッパ文学に傾倒するが無事神学試験にパスして牧師の資格を取得した。大学卒業後ランゲラン島のエゲリケで家庭教師の仕事に就くことになる。この島での最大の出来事は3年間の滞在中家庭教師の少年の母親に思慕を募らせたことである。しかし、失恋し、傷心を癒すため研究と創作活動に励む目的でコペンハーゲン移住した。そして意欲的な創作活動の結果、1808年には『デンマークの仮面舞踏』(Maskerade ballet i Danmark)を著し文学界にデビューした。この作品のなかで彼は1807年のイギリス艦隊によるコペンハーゲン砲撃による敗北に関してデンマーク国民が真摯に対峙していない現状を憂えて国民に苦言を呈したのである。

また、同年『北欧神話記』(Nordens Mytolog)を著し、北欧神話史に一石を投じ古代北欧神話の研究に貢献した。同書は評判を呼びドイツ語、スウェーデン語にも翻訳された。こうして彼は歴史研究に精力を注ぐことになった。1810年から1811年にかけて短期間であるが、讚美歌『青き空はうるわし』(Dejlig er Himmel blå)他多くの讚美歌を創作した。また、牧師として彼は1811年～12年にかけて生まれ故郷のシェラン島のウズビュのヴォー・フレールサー教会の牧師補に就任し、生活の糧を得る人気作家と教会活動（復興）家と牧師の二足の草鞋を履いた

そして、1831年コペンハーゲンのフレゼリク教会の説教師に応募し、無給説教師となる。また、1839～1872年までヴァートフ教会の牧師を務める。その

後、憲法制定議会委員、1849～1866年迄政治家として活動、下院議員を経て上院議員となる。そして、1872年9月2日に死去する。この間、グルントヴィの思想を継承した農業を中心のカリキュラムを持つ多くのフォルケホイスコーレが設立された。

（2）キリスト教批判と農民運動

当時敬虔なルター派であったデンマーク国教会はキリスト教の「真理」と「人間本性」との関係を明確にすることはなかった。かつてグルントヴィは教会の基礎は聖書にあるという教会観をもっていた。しかし、彼はのちにキリストの教えは礼拝に来る民の心にあるという考えに至った。すなわち、信仰は人々の日常生活の経験の中にあるとした。彼の教会に対する批判の著書は1825年の『教会の応酬』(Kirkens genmæle)であった。同書の発行によって、聖書はキリスト教の基礎であるという教会観をもつ当時の合理主義神学者H・N・クラウセン(Henrik Nicolai Clausen)と真っ向から対立した。その結果、彼はデンマーク国教会から批判され処罰されることとなり、以後彼の著作は検閲(1837年まで)を受けることになった。しかしながらグルントヴィのキリスト教に対する解釈を支持する農民は教会改革運動を起した。彼の教会改革運動は次第に市民(とくに農民)に共感を呼び、国王フレデリク6世(Frederick VI)の庇護を受け、国王の進言でイギリスの自由主義を学ぶためイギリスに留学(3度)することになった。イギリスで「自由」を学んだグルントヴィは、帰国後、国教会に対して説教を認めさせ、1856年には彼が創作した讚美歌を歌うことも同時に容認させたのである。この背景にはこれまでの彼の民衆(農民)を基盤とした「民衆」のためのフォルケホイスコーレ運動にあった。すなわち、1788年の農民解放令がその出発点であり、その後も領主を中心とした封建的な村落共同体は独立自営農民たちの共同体への移行を推進した。そして、1814年の小学校の義務教育化をかちとり、1841年には農民参加の地方自治法の公布により今日のデンマークの地方分権への礎が築かれた。(1) これまで蔑まれてきた農民たちは「農民の友協会」(1846)という政治結社を組織して政治的一大勢力となり、デンマークの政界に確固たる地位を構築し、農民の政治参加への道筋がつけられたのである。

（3）スレースヴィ戦争の影響

デンマークでは、1660年より続いていた絶対君主制(デンマークの絶対君主制は、人民による権力の

国王への譲渡方式であった)がフランスの2月革命の影響もあり、デンマーク国内で民主化運動が起こり、1848年にフレデリク7世は絶対君主制の廃止を受け入れ、1849年に立憲君主制を定めた「デンマーク王国憲法」が公布された。すなわち、無血革命によって絶対君主制が崩壊し、立憲君主制が誕生したのである。この結果、特権階級(=ブルジョアジー)が政治的権力を把握することになった。しかしながら国民の大多数を占める農民階層の自由と平等を得ることは繋がらなかった。すなわち一部のエリートの特権階級による政治支配であり、そこには民主主義的素地は希薄であった。そこでグルトヴィは農民が民主主義を勝ち取るためには農民・手工業者に対する教育の必要性を痛感し、その思いがフォルケホイスコーレ運動へと繋がっていくのである。

こうした特権階級と農民階層との対立という国内的不安定化状況のもと国外的にはドイツとの領土をめぐる歴史的紛争があった。そしてついにデンマークとスレスヴィ・ホルステンとの第1次スレスヴィ戦争(1848)が始まった。当初デンマーク軍は緒戦を制し有利に戦いを進めていたがプロイセン軍の参戦により一挙に戦況が不利となった。しかし、デンマーク軍の反撃で休戦に持ち込み1850年に終結し、デンマークとプロイセンとの間に講和条約が締結された。

その後、プロイセンではビスマルク(Bismarck, Otto)が宰相となったが、彼はドイツ帝国統一の建設を目論んでいた。両国関係は再びユトランド半島南部のスレスヴィをめぐる互いの利害関係が対立することとなった。そして第2次スレスヴィ戦争(1864)が勃発した。結果として、1864年にデンマークがプロイセン・オーストリア連合軍との戦争に敗れて、ラウエンブルク(Lauenburg)公国、スレスヴィ公国(Schleswig)、ホルステン(Holstein)公国の3つの公国がプロイセン・オーストラリアに譲渡された。(2)

第2次スレスヴィ戦争の敗北後、デンマークはユトランド半島の3つの公国(デンマーク系住民とドイツ系住民が混在)を失うことになるが、これによってデンマーク人とドイツ人の連合国家からデンマーク人中心の国民国家に移行することになった。また、この敗北はデンマーク人にとって大きなショックであり、デンマークの民主化を進めるうえで大きな痛手となった。

3. グルトヴィとホイスコーレ

(1) 「死の学校」から「生のための学校」へ

デンマークでは、絶対王政の崩壊から自由主義的君主制へ政治体制が変化するが、グルトヴィは国民の大多数を占める農民の教育体制を整備することが急務であると考えていた。そのことが結果的に農民の声が政治に反映されることになる。しかし、政治は新たな仕組み・体制に変化した。主権力者は一握りのブルジョアであったため農民の置かれた状況は一向に改善されなかった。そこでグルトヴィは農民の自由を獲得するためには旧来のラテン語を中心とした一部の特権階級のための教育のあり方を変革する必要性を感じていた。当時の教育の支配は王室にとってかわった都市ブルジョアジーも、またコペンハーゲン大学で貴族や牧師たちの子弟と肩をならべて、普遍ヨーロッパ文化、ギリシャ・ラテンの古典や近代フランス・ドイツの学問を学んだ人々であった。グルトヴィの言葉を借りれば、「(大学へ入るための)ラテン語学校の毒に染まった子どもたち」でしかなかった。(3)

こうした特権階級の養成は、絶対王政時代とほとんど変化がなかったのである。

その教育方法はラテン語を中心にギリシャ・ラテンの古典文化並びにドイツ・フランス啓蒙文化を教授・暗記・詰め込みによる一方的な教育方法であった。そこにはコミュニケーションを意図する「生きた言葉」(「語り合う言葉」)と「相互作用」による対話は存在せず、民衆教育ではなく、エリート養成の教育であった。すなわち、聖職者・学者・官僚を養成する為の教育であった。そこには教育において基本理念である教師と学生・生徒の対話は存在せず従順な奴隷を求める「死の学校」であった。このような現状に対してグルトヴィは特権階級の養成ではない、一般市民(農民)のための学校の必要性を提唱した。それが、フォルケホイスコーレであった。その基本理念は、デンマーク人の自尊感情を奮い立たせるためのデンマーク語による北欧神話(北欧文化)を中心とするものである。

それは、単なる教授・暗記・詰め込みによる教育方法でなく「相互作用」と生きた言葉による「生のための学校」である。この背景には彼のオフィスでのラテン学校での味気ない無味乾燥な教育の憎悪、反省がある。

(2) グルントヴィの自由主義思想

グルントヴィの自由主義思想形成にとって影響を与えたのが1828年から3年間のイギリス留学であった。

彼はもともとイギリス文学に興味があり、イギリスの市民生活、学問的研究からも影響を受けた。なかでも活気ある市民生活に強い印象を受けたのである。当時のイギリスは産業革命を経て資本主義社会を形成していた。そして、資本家と労働者という階級社会を構築し、人口の都市集中、労働環境・住環境・衛生問題等をめぐって労働者と資本家の対立があった。しかしながら、幾多の問題を抱え乍らイギリスは、社会政策（工場法:1833、救貧法:1834等）や労働運動（チャーティスト運動）や社会主義思想の勃興等により、少しずつ社会改革が行われ議会制民主主義の体制が整備されつつあった。また、産業革命のもとで経済の発展に伴って政治においても選挙権の拡大に伴う自由主義的改革が行われた。その結果、イギリスの民主政治の確立に繋がることになった。こうした時代背景もとのグルントヴィのイギリス留学は彼の後の活動に大きな影響を与えたのである。とくに留学における市民生活で会得した「自由」は1827年の主著『宗教の自由』(Om Religions—Frihed)による見識を覚醒させるものであった。

彼は、その生活習慣が英国社会の個人的自由に端を発すると知覚し、それ以降のグルントヴィの40年の出版や政治上の生活の成功は、彼が英国で得た諸々の印象やそれらの印象から沸き起こった諸々のアイデアに基づくものであった。(4)

このようにグルントヴィのイギリス留学は彼ののちの諸活動に大変大きな影響を与えるものであった。ここで、彼の提唱する自由の概念について述べる。彼の自由の概念は①宗教の自由(良心の自由)。これは精神的な側面である。②市民の自由。これは市民社会と自由市場にその現れをもつ。

③個人の自由。これは身体的自由も含まれる。(5)

彼の自由概念構築の背景には民主主義の発祥の地であるイギリスに関する研究(シェークスピア研究)が多分に影響しているのである。

彼が説く自由とは、思想が異なる者たちへの寛容を意味するだけでなく、その違いを意見の生きた相互作用がなされる条件として実践的に見なすことである(6)と定義したのである。

(3) フォルケホイスコーレの構想

グルントヴィのホイスコーレ構想は、ラテン語やドイツ語に基づく当時の人文主義教育を激しく批判し、デンマークの①国王②民衆③祖国④母語の「四つ葉のクローヴァー」からなるブロックの民衆的「党派」を自認した。すなわち、グルントヴィのホイスコーレ構想ははっきりと、18世紀のA・スミス(Adam Smith)の文明的国民やフランス革命の普遍的・政治的国民とは位相を異にするもので「民衆的国民」の立ち上げの企図がある。(7)

すなわち、一部上流階級(上層階級)のための教育機関ではなく広く民衆(農民)のための教育機関の学校設立構想である。彼は学校の教師の経験はないが、これまで家庭教師や教育活動の経験があった。その経験は当時の学校制度に対する疑問に繋がった。その結果、学校は広く民衆が教育を受けることによって民衆自身が政治への参加を可能にする民主主義的教育の場であることが重要であるとグルントヴィは指摘した。この構想の背景には彼の幼少時代に受けた障害をもった老女との人間味溢れた対話、6歳から6年間のユトランド半島でのフェルド牧師のもとで学んだ自然と北欧神話の世界、ラテン語学校での辛くて息苦しい学校生活、3年間のイギリス留学先のケンブリッジで体験した教師と学生の対話形式の授業(「相互作用」)或いは市民生活の体験により得た「自由主義」、コペンハーゲン大学卒業後の人気作家と聖職者(布教活動)との二足の草鞋の生活、合理主義神学者H・N・クラウセンとの教会観についての論叢等の経験があった。

フォルケホイスコーレの構想は、デンマーク語を駆使した北欧神話やデンマーク文化等による民衆の人的成長を目指した誰でも学ぶことができる民衆のための学校であった。グルントヴィのフォルケホイスコーレ構想には当時の国王クリスチャン8世(Christian VIII)も賛同していたが絶対王政の崩壊により、国王に代わって政権を取得したブルジョア階級の指導者たちは、このフォルケホイスコーレ構想を理解することなく従来通りの特権階級のための教育を継続することを考えていた。

しかし、農民運動等の広がりも手伝って、熱心なグルントヴィの支持者により最初のフォルケホイスコーレが1844年にシュレスヴィの南部に位置するロディンに開校された。その後、幾多の変遷を経てフォルケホイスコーレ運動の継承者であるコル(Christen Kold)が1851年、グルントヴィと支持者

の協力を得て農家を改良し、農民の子弟を受け入れたフォルケホイスコーレが開設された。この教育思想はのちのデンマークにおける公立学校にも浸透し、試験のない対話中心の教育システムへと継承されていくのである。

最後にグランドヴィーのフォルケホイスコーレ構想はデンマークに流布していたラテン語やドイツ語に基づく人文主義教育を激しく批判し、デンマークの①国王②民衆③祖国④母語の「四つ葉のクローヴァー」からなるブロックの民衆的「党派」を自認していた。(8)

(4) フォルケホイスコーレを構成するキーワード

デンマークに開設されたフォルケホイスコーレの建設は、その後全国各地に広がることになる。この節ではフォルケホイスコーレの構成するキーワード(図表-1参照)について述べる。

①キリスト教

デンマークにキリスト教が広まったのは9世紀頃と言われている。それまでは北欧の多神教が信仰されていた。デンマークにキリスト教を伝えたのは伝道師のアンスガル(Ansgar)であった。彼は北欧伝道の途中でデンマークに立ち寄りキリスト教の布教活動を行った。その後キリスト教は国民の間に浸透し国教となる。そして、16世紀のルター(Martin Luther)の宗教改革がデンマークにも波及した。当時、絶対王政であったが実質的に権力を把握していたのは国王ではなく、貴族であった。そして、クリスチャン3世(Christian III)のもと宗教改革によってカトリック教会に関係する聖職者の罷免、教会領の没収が行われ、ルター派の国家とした。のちにグランドヴィーによる教会批判の結果、教会観が聖書中心主義から信仰者中心主義に転換されることとなった。

ところで、何故キリスト教がデンマークにおいて広く布教したかの理由について、グランドヴィーは主著『ホイスコーレ・上』(Højskole)で次のように書き記している。信仰は自由の問題であるという感情がデンマークにおいてたいへん深く、力強いものであったが、このことは、キリスト教にそれ固有の諸手段による布教が認められ、何らかの障害もなかった国は他になかったこと、さらにキリスト教がこれほど遅い時期に国法となった国も他になかったことからはっきりわかることである。(9)

幼少の頃からカトリックに対する親近性から少なからずしも影響を受けてきたグランドヴィーにとっ

て、キリスト教はフォルケホイスコーレに運動において「慈愛」の精神は民衆の精神的支柱となった。

②デンマーク語と文化

当時のデンマークの教育はラテン語中心の授業で、ブルジョア階級(聖職者・貴族)の子弟を対象とする教育機関であった

これに対してグランドヴィーは下層階級に属する庶民や農民を未来のデンマーク社会を構成する要員として位置付けた。そして、庶民・農民がデンマーク人としての誇り(愛国思想)と自信を会得するため、ドイツやフランスの文化ではない祖国の母語デンマーク語によるデンマーク独自の文化を習得することによってデンマーク人としてのアイデンティティを確立すると同時に、庶民・農民の士気を鼓舞した。

③民主主義

グランドヴィーはフォルケホイスコーレ運動を進める上で民衆に欠如していたのは「自由」であった。彼が生きたデンマークの社会は身分社会であった。絶対王政時はピラミットの頂点は国王で絶対王政崩壊後はその頂点に貴族。聖職者が君臨した。

グランドヴィーが生きた時代は第1身分が聖職者、第2身分は貴族、第3身分が庶民、農民は最も低い第4身分で国民の大多数を占めていた。したがって農民は社会的地位も低く、経済的には困窮する者も多く、当然、政治的にも弱者であった。

グランドヴィーが最も教育を必要とした階層は農民でありそこには差別・不平等が蔓延っていた。この身分社会の中で同時代に生きた童話作家のアンデルセンも父親が靴職人であったため、長期間にわたり「姓の差別」で苦しんだといわれている。

しかし、1848年にフランス革命の影響もあり、コペンハーゲンで大規模な市民運動が勃発し、自主憲法の制定を要求した。これに対して王室は市民の要求に屈する形で絶対王政が終焉することになった。そして、翌年の1849年に自由主義を標榜する「デンマーク憲法」が発布されデンマークの民主主義がスタートとした。この結果、グランドヴィーは国民意識形成のため民衆のための民衆教育を要求した。そして、彼は雑誌「デンマーク人」(Danskeren)(1848~1851年刊行)で「隷属から自由へ、階級制度から万人の平等へ、全体の必要と共通善と関わらなければならないものは全て秘密から公開へ」と表現し。(10)フォルケホイスコーレ運動において民主主義思想が重要であると自認していたのである。

④北欧の学問との連携

北欧ではかつてスウェーデンとデンマークの幾度かの覇権争いがあった。

その後19世紀にスカンジナビア主義的芽生え北欧の共通のアイデンティティが確立していった。グルントヴィは北欧の精神的な統一に関する理念をまとめ、この統一の本質は他の国民を制圧し、支配しないことだとみている。彼は北欧の諸国民を一本の共通の幹に伸びた枝と考えている。(11)

このように彼は自己を侵すべからずものとし、個人の自由を最大限尊重したのである。こうした土壌の上に立って彼は北欧諸国間における学問的連携をフォルケホイスコーレ構想において考えていたのである。その結果として彼はラテン語大学に代わる北欧大学設立構想を持っていた。このことから、グルントヴィが考えていたフォルケホイスコーレは聖職者や官僚の一部のエリート養成ではなく北欧の人々が望む庶民のための学校であり、北欧の発展を目的とした北欧大学構想である。

実際、フォルケホイスコーレはデンマーク国内だけでなく北欧諸国に波及した。

⑤生の啓蒙

啓蒙思想は17世紀末にヨーロッパに起こり18世紀に全盛期を迎える。その意味は宗教・政治・社会・教育等における古い慣習を改め合理的思想に基づいて新たなる秩序を生み出す事である。

グルントヴィはこれまでデンマークにて行われてきたラテン語（ラテン語支配）を中心とした貴族・聖職者等のための中世以来の学校制度を「死の学校」と批判すると同時に不必要で有害ですらあると断定した。何故ならば退屈で無味乾燥な死の学校は人間の生のためにおいて啓蒙的でなく、本来多くの子どもたちが具備している「生きる力」を排除するからである。

そこで彼が提唱したのは、学校は生のための（生きた）啓蒙の施設でなければならないとする。すなわち、学校は生の問題を取り上げ、生の有益性を啓蒙することが大切であるとする。これまでの教育がラテン語中心の学校・教育で聖職者や官吏になるための単なる手段にすぎない。そこで、本当の愛国心をもった庶民を育てるための生きた学校でなければならない。これまでのデンマーク社会に蔓延っていた旧教育体制を打破し、フォルケホイスコーレの基礎を支える「生きた啓蒙」が成熟した民衆を生み出すために必要である。

そして「生の啓蒙」は民衆の生の教育において、労働と精神的成熟の成果を果たし、今日のデンマークの専門的知識と実践を合体させた教育制度の土台を築いたのである。

⑥相互作用・生きた知識

グルントヴィの提唱する相互作用は教育の実践場面において知識を一方的な権威主義にて暗記させる教育ではなく、また、単に知識を教授するのではなく、対等関係における対話・コミュニケーションを意味する。対等による人間関係は相互の意見・思いを吐露し相互の「信頼関係」・「有効関係」を生み出す事に繋がり、そこに民主主義の基盤が形成されることになる。

グルントヴィはこの方式をフォルケホイスコーレに用いる事によって生きた知識が養われるとした。



図表－1 フォルケホイスコーレを構成するキーワード

4. 民主主義と社会福祉国家の形成

(1) 民主主義と社会福祉国家形成への影響

グルントヴィは国民の間に民主主義的思想を広めたが、彼自身必ずしも民主主義者ではなかった。すなわち、彼は民衆の立場に立った「民衆主義者」であったが基本的に王政主義者（君主主義者）で民主主義のよさを認めながらその危うさから懐疑的であっ

た。しかし、彼は民衆のためのフォルケホイスコーレ運動を推進するため民主主義（自由・平等・博愛）の必要性を痛感していた。当時のデンマークの人口の大部分を占めていたのが農民である。グルントヴィはこの農民層に学問を学ぶ機会を与えることが農民の解放に繋がり、知識階級（特権階級）と対等に議論・討論することができるようになって考えていた。そしてフォルケホイスコーレ運動を通じて今日のデンマークの民主主義が培われたといえる。一方、福祉国家の構築であるが、世界で最も早く福祉国家の建設に着手したのは第2次世界大戦後のイギリスである。福祉国家の基本理念は、イギリスの社会改良主義者であるウェブ夫妻（Webb, Sidney & Beatrice）によって提唱された最低生活保障であるナショナルミニマムに求めることができる。この理念はイギリスの経済学者ベバリッジ（Beveridge, William）の社会保険の原理に導入され社会保険を中核としたイギリスの福祉国家建設が始まるのである。（12）

それでは、グルントヴィの思想がデンマークの社会福祉国家形成にどのように影響したのであろうか。彼はこれまで述べてきたように教育思想家であると同時に教会改革者、政治思想家でもある。彼の理想は「豊すぎる者は少なく、貧しい者はより少ない社会」（13）の建設にあるとした。

グルントヴィの活動はグルントヴィ派に継承された。グルントヴィ派はグルントヴィの理念に基づく社会活動（特に教育活動）に貢献したが、それが直接的に社会福祉にはつながったわけでもなく、国民高等学校出身の人材の手で社会福祉国家建設されたわけでもないが、デンマークの社会福祉国家における精神的な起点をたどろうとすると、グルントヴィらの活動およびとくにその国民高等学校に言及しない人はいないであろう。それほどまでに、グルントヴィと現代デンマーク社会との結びつきは深いといえる。（14）

このようにして、デンマークの北欧型普遍主義社会福祉国家の形成は、グルントヴィのフォルケホイスコーレの影響を受けて1970年代に形成されたのである。

（2）北欧型普遍主義社会福祉国家

デンマークの社会福祉は、多様な幸福観をもった諸個人の生涯にわたる生活探求を支援する普遍主義的制度である。この制度は社会立法を端緒としてこの方、1930年代に総合的に法制化され、第2次大戦

後にその具体化が諸党派の合意、妥協にしたがって進められてきた。（15）

デンマークの社会福祉はスカンジナビアモデルの先駆者と言われている。その理由は北欧諸国共通の福祉モデルの範となっているからである。具体的には、理念・制度・政策・実践等である。ここで、デンマーク社会福祉国家（北欧型）の特徴をあげると次の通りである。①普遍主義：全ての国民を対象とした公的社会サービス②公的施策主義：基本的人権と権利を保障することを基本原則とする高水準の経済的保障③再分配主義：所得移転給付（社会保障給付）により生活困窮者対策を行っている（例えば、生活困窮者が高齢者住宅に入居する場合、たまたま入居費用が不足している場合、不足分を自治体が補う等）④対人サービス：高齢者或いは児童への対人サービスは自治体負担により原則無料である（ただし、今日自治体の財政負担を軽減するため民間サービス提供業者の参入を認め、公的サービスとの競合を行っている）⑤地方分権化：社会福祉、教育に関する権限と財政は地方自治体（コムーネ）に委譲されており、その権限は人口規模に関係なく与えられている。⑥女性の社会進出と支援：女性の社会進出は高度経済期の労働力不足対策であるがその反面納税率が上昇して社会保障・社会福祉財政に貢献し日本の現状（待機児童の存在）と真逆で女性の社会進出を支えているのは子育て支援制度の充実である。例えば、日本と異なるのは、育児休業の期間・所得保障休業制度の利用率、子ども手当の額と期間、産前産後休暇の相違等である。

これらの事柄が日本と比較して、デンマークは優位であり、女性の社会進出を促進し、結果的に合計出生率の高さに結実している。

制度	デンマーク	日本	
産前産後休業	期間	産前6週間と産後8週間（母親） 産後2週間（父親）	産前6週間と産後8週間（母親） 産後8週間（母親&父親）
	所得保障	最大100%	3分の2相当
育児休業	期間	原則、子どもが48週を迎えるまでの32週間（母親&父親）	原則、子どもが1歳を迎えるまで（母親&父親）
	所得保障	最大100%	50%
休業制度の利用率	母親：N/A 父親：79% (2008)	母親：86.6% 父親：2.3% (2014)	
子どもへの手当	期間	18歳を迎えるまで	15歳到達後最初の3月31日まで
	月額	0-3歳未満 約24000円 3-6歳未満 約18000円 7-18歳未満 約15000円 ※条件によって補助追加あり	0-3歳未満 15000円 3-小学就学終了 10000円 第1&2子 15000円 第3子以降 10000円 中学生 所得額以上 5000円
その他	出産費無料 育児給付金（親が無職の場合）	出産育児一時金	

図表-2 「デンマークと日本における子育て支援制度の概要」（出典：富士総研2016年）

こうしたデンマークの子育て支援を支えているのが、子育て支援政策である(図表-2参照)である。

ところで、女性の就業率向上の大きな要因のひとつは、男性の育児参加の法制化である(1984)。デンマークに続いて制度が導入されたのはノルウェー(1933)、スウェーデン(1955)であった。そのふたつは、未就学児の保育サービスの充実である。保育所入所は0歳から3歳未満であるがこれらの児童を受け入れるのが保育所であり、3歳児以上小学校入学までの児童は幼稚園に入園することになっている。こうした未就学児童の受け入れ体制が整備されていることが日本と異なって、女性の就労率を高めている要因であり、デンマークのGDPを高め、結果的に国民の所得を向上させることに繋がっている。すなわち、グルントヴィ以降のデンマークの社会福祉国家の思想的基盤である民主主義(自由・平等・連帯)の存在を再確認せざるを得ないのである。

(3) 社会福祉国家の危機

デンマークは他の福祉国家同様、1970年代から1990年代にかけて福祉国家の危機を迎えた。この事態に対してデンマークは世界経済のグローバル化と新自由主義の波に翻弄され財政危機を迎えるが、この危機に対して高質の公的福祉を維持しながら、公共組織の合理化や応答性の改善、民主化を進めて、経済と社会生活を安定的に立て直し、公的福祉と経済との好循環のモデルを作り出したことである。

(16)

デンマークの社会福祉の最大の特徴は既に述べたように普遍主義制度である。この制度はデンマークの社会改革で制定された「社会サービスに関する法律」(社会省所管法律第454号・1997年6月10日制定)に基づいている。同法律は1976年に成立した「社会支援法」が廃止されてそれに代わるものとして制定されたもので、今日のデンマークの社会サービスの体系を規定したものである。尚、第1条で援助の目的を個人の自立のための可能性を助長すること又はその日常生活を容易にし、かつ生活の改善すること。また、この法律に定める援助は個人とその家族の自己責任を基礎と定めている。こうした公的福祉サービス中心のデンマークにおいて、社会福祉国家の危機は国民生活の上において最大の危機であった。しかも、新自由主義経済と経済のグローバル化の流れの中で如何にして従来の社会サービスを維持できるかが大きな課題であった。そこでデンマークでは、社会改革として公共組織の合理化(行政の合理化・社

会サービス部門における民間活力の導入)と民主化並びに経済活動の活性化、積極的な労働政策、緩やかな雇用者保護、手厚い失業中給付等による就業支援を組み合わせた「フレキシキュリティ」(英語のフレキシビリティとセキュリティを合わせた造語で柔軟な雇用と手厚い失業補償)が若者の失業者の防止或いは対策ともなっている。こうしたデンマークの積極的労働政策が国家の財政の健全化を実現すると共に主体的国民性(サムフンズ:共同社会と福祉サービスの国民意識下に内在化する)が福祉国家の危機を乗り越えてきたのである。周知の通りデンマークは第2次世界大戦後、社会民主主義思想の旗印もとで普遍主義型(公共型)福祉国家を形成してきた。具体的には、脱市場主義、脱家族主義を掲げ地方分権化(全能者としての市町村)のもとで、公的施策主義(基本的人権と権利を保障)を掲げた社会サービスの提供である。また、そのサービスは、全ての国民を対象とした公的福祉サービス中心である。

5. 転換期の教育制度

(1) 国民学校の改革



図表-3 デンマークの教育体系(出典:外務省ホームページ)

デンマークの教育体系は図表-3の通りであるが、まず、グルントヴィが提唱し、現在のデンマーク公教育の構築に影響を与えたフォルケホイスコレについて、その概要を述べる。周知の通りフォルケホイスコレは「国民高等学校」であると表記されているが、本来、その目的は旧来の特権階級の教育を否定し、学校に通えない農民のために開校されたものである。

その運動は民主主義(自由・平等・博愛)についてフォルケホイスコレを通じて学ぶことにある。現在、デンマークには70校近くが存在する。入学資

格は17.5歳以上でその教育目的は民主主義の育成で、教育方針は、入学試験なし、単位・資格付与なしの対話中心の教育を行っており、入学者全員が学校内の寄宿舎に入ることになっている。また、教育分野は①アート②スポーツ③哲学④福祉等となっている。学生の出身地は世界各国地で、授業は原則に英語で行われている。また、近年ではシニア向けのフォルケホイスコーレも開校されている。学ぶ内容も専門性重視ではなく教養中心となっている。尚、学校の規模は大きくなく、小規模なものが大多数を占めている。ところで、今回のデンマークの教育制度改革である、改正「国民学校法」(2014)に基づき、国民学校改革(2015年8月1日施行)が行われると同時に国民学校法改正の目的のひとつである職業教育改革(2015年8月1日施行)が行われた。まず、国民学校改革であるが、その改革の主たる理由の①デンマークが公的教育において他の北欧諸国と比較して遜色のない費用負担を行っている。しかし、OECD(経済協力開発機構)によるPISA(「生徒の国際学習到達度調査」)の成績は中位である。故に生徒の成績向上を図る(とくに読解力と数学)ため教育改革が実施されたのである。②それに伴う教育内容の充実である。

国民学校の生徒の成績向上の為に掲げる事項は次の3点である。

- ①国民学校はすべての生徒がその潜在能力を発揮できるようにしなければならない。
- ②国民学校は学習面の結果に対する社会的背景の影響を少なくしなければならない。
- ③国民学校の専門的知識と実践への敬意を通して、学校の信頼と生徒の幸福が強めなければならない等となっている。(17)

第1点は授業時間数の増加である。改革前の旧「国民学校法」では0～2学年の年間授業時間は、800時間、以下同様に3学年は880時間、4～5学年は960時間、6～7学年は1,040時間、8～10学年は1,120時であった。これに対して、改正「国民学校法」では年間の最低授業時間は0～3学年では1,200時間、4～6学年は1,320時間、7～9学年は1,400時間となった。第2点は改正法によって教科ごとの授業時間が規定されたことである。例えば、デンマーク語を例にとれば1学年330時間、2学年300時間、3学年270時間、4学年210時間、5学年～9学年210時間となっている。尚、国民学校の分野別教科目名は①人文科学科(デンマーク語、英語、

ドイツ語またはフラン語、歴史、キリスト教、社会)②自然科学(算数/数学、自然/技術、地理、生物/物理)③実技(体育、音楽、美術、手芸及びデザイン、調理)④選択科目となっている。第3点は、教科別授業時間(必修最低時間数及び推奨時間数)の規定である。改正後の学年ごとの年間最低授業時間数は幼稚園クラス600時間、1学年750時間、2学年750時間、3学年780時間、4学年900時間、5学年930時間、6学年930時間、7学年960時間、8学年960時間、9学年930時間で計8,490時間となっている(図表-4参照)。(18)

教科別授業時間(必修最低時間及び推奨時間数)

学年	幼稚園クラス	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計時間数
A. 人文科学											
デンマーク語 (必要最低時間数)		330	300	270	210	210	210	210	210	210	2,160
英語(推奨時間数)		30	30	60	90	90	90	90	90	90	630
ドイツ語またはフランス語(推奨時間数)						30	60	90	90	90	360
歴史(必要最低時間数)				30	60	60	60	60	60	30	360
キリスト教(推奨時間数)		60	30	30	30	30	60		30	30	300
社会(推奨時間数)									60	60	120
B. 自然科学											
算数/数学(必要最低時間数)		150	150	150	150	150	150	150	150	150	1,350
自然/技術(推奨時間数)		30	60	60	90	60	60				360
地理(推奨時間数)								60	30	30	120
生物(推奨時間数)								60	60	30	150
C. 実技											
体育(推奨時間数)		60	60	60	90	90	90	60	60	60	630
音楽(推奨時間数)		60	60	60	60	60	30				330
美術(推奨時間数)		30	60	60	60	30					240
手芸及びデザイン、調理(推奨時間数)					90	120	120	60			390
D. 選択科目(推奨時間数)											
								60	60	60	180
E. 学年ごとの年間最低授業時間数											
	600	750	750	780	900	930	930	960	960	930	7,890(幼稚園クラスを除く)/8,490

備考 時間数は時計の1時間を指し、休憩時間は含まない

図表-4 国民学校法付表1

(出典:谷雅泰「国民学校の改革」谷雅泰、青木真理編著『転換期と向き合うデンマークの教育』ひとなる書房 2017 p35 (一部加筆修正)

第4点は、UU(補足的授業)とFF(専門深化)が週2回設けられたことである。

これらの教科の参加は任意であるが、結果として、放課後生徒たちが学校に滞在す時間が長くなり、生徒達の放課後の自主的活動が制約されることになった。

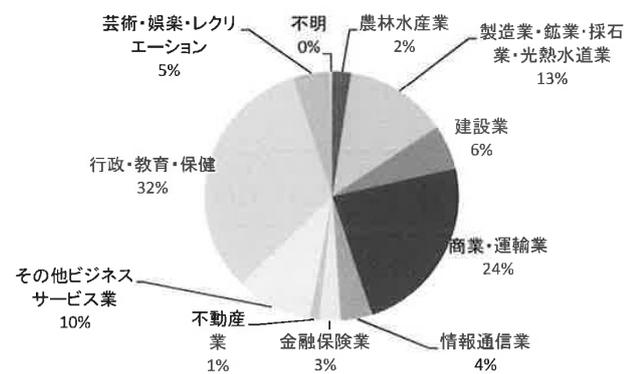
今回の改正の特徴はこれまで指摘したように①授

業数の増加②教科ごとの授業の時間配分の規定③教科別授業時間の規定④UUとFFが新たに規定されたことである。国民学校法の改正によりデンマークの教育制度改革がPISAの結果（デンマークの成績は中位）を意識した全生徒の学力向上をねらったものであるが、強いて言えば、今回の教育改革（国民学校改革）が学力の底上げなり、デンマーク経済の国際競争力強化に繋がるかも知れない。しかし児童・生徒の放課後の自由な時間が削減されることはグルントヴィの教育思想を継承し、北欧諸国の教育制度を牽引して、デンマークの教育を育ててきた民主主義教育（自由・平等・博愛）が後退しないかを危惧する。

（2）職業教育の改革—介護専門職

デンマークの職業教育には、①EUD（若年層の職業教育）②EUV（成人のための職業教育）③EUX（職業訓練）がある。（19）

今回の職業教育の改革は、改正「国民学校法」に基づいているが、その目的は①職業教育10年生クラスの新設（2015年8月の新学期から実施）と②労働市場の需要に適切に対応できる専門職を養成するためである。これまで10年生クラスは設けられていて、生徒の教育選択の期間としての湯役割をはたしてきた。しかし、今回の新たな職業教育10年生クラスの新設は国民学校を修了し、職業教育に興味を示しながら進路に自信を持っていない生徒のために進路決定のための準備期間として設けられたのである（年間最低840時間の授業数）。

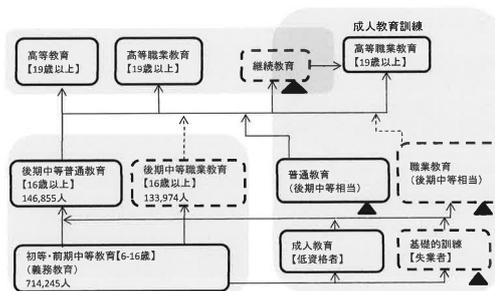


出所：StatBank Denmark

図表-5 業種別就業者数 (2015年第4四半期) (出典：「北欧の公共職業訓練制度と実態2016」独立行政法人 労働政策研究・研修機構p57)

一方、②についてであるが、デンマークの業種別就業者の分布について図表-5から検討する。デン

マーク国内の業種別男女の就業者数の分布において、圧倒的に多いのは行政・教育・保護で全体の32%を占めている。この教育・保護（福祉職）分野では女性の占める割合が高く70%が女性となっている。次に多いのは商業・運輸業24%、そして、製造業・鉱業・採石業・光熱水道13%、その他のビジネスサービス業10%となっている。こうしてみるとデンマークの業種別就業者のうち、如何に多数の就業者が公的サービス部門に従事していることが分かる。このようにデンマークの就業者の割合を概観してきたが、これを支える職業教育の改革について明らかにする。



注：破線の矢印は、高等教育の一部のプログラムのみ進学可能であることを示す。また、図中で▲の付されたプログラムは、事前学習の評価による参加が可能。出所：Cedefop (2014)を元に簡略化。

図表-6 教育訓練制度の概要 (出典：図表5と同じp60)

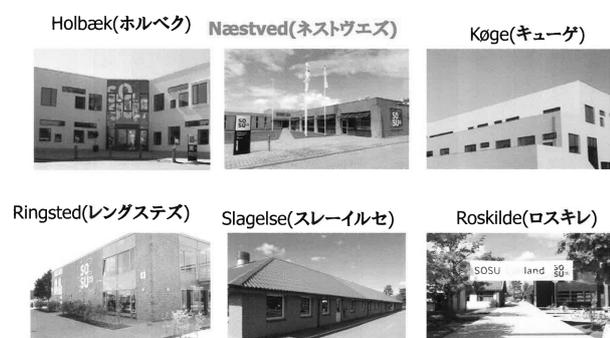
図表-6は教育訓練制度の概要であるが教育訓練は初等・前期中等教育（国民学校）を卒業すると、後期中等教育（高校）進学か或いは後期中等職業教育（専門学校）進学に分かれる。その割合は図表-3の通りであるが各約50%の割合となっている。

後期中等教育高校には①普通高校（STX：3年生）、②技術高校（HTX：3年生）、③商業高校（HHX：3年生）がある。また、後期中等職業教育には①上級専門学校（HF）：看護師、社会福祉士、ペタゴ等の養成、（ただし、改正以前はペタゴの資格で国民学校の教員（0学年を除く）に就くことができたが、法改正以降、4年制大学卒でなければ国民学校の教師に就けなくなった）②社会・健康養スクール（SOSU）：社会保健ヘルパー（SSH）、社会保健アシスタント（SSA）養成、③職業教育（EUD）：大工、煉瓦職人電気工等を養成④商業教育（HG）：スーパー、百貨店等の販売員の養成⑤EGU：障がい者のための基礎的職業教育（EGU）：障がい者が学校で学ぶことができるよう援助する教育等が開設されている。

尚、図表-6の成人教育は中等教育の終了資格を持たない成人に対するプログラムである。また、職

業教育（後期中等教育相当）または、後期中等職業教育修了者は高等教育（大学）の一部のプログラムの進学が可能である。

次にデンマークの高齢化社会を控えて将来的に社会的ニーズの高いSOSU（社会・健康スクール）について国民学校法改正後の変更点について明らかにする。図表－7はデンマークに存在するSOSU校で6校存在する（ホルベク市、ネストヴェズ市、キューゲ市、レングステズ市、スレーイルセ市、ロスキレ市）。設立の事業体は全て自治体であり、授業料は無料となっており、自治体から在学中給料も支給される。このSOSUの設立のきっかけは1990年の「社会保健基礎教育法」の成立である。同法律の制定により社会保健教育の体系が整備された。



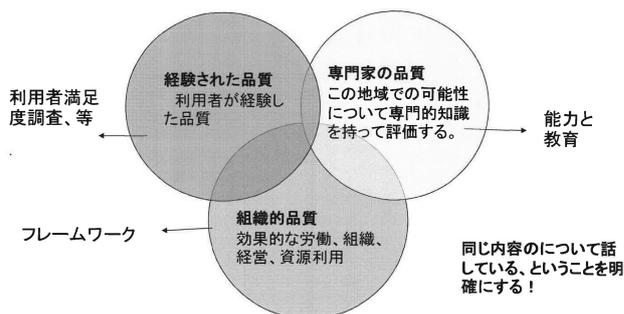
図表－7 デンマークのSOSU校の所在地
（出典:sosu「welcome to social&healthcare college zealand」2017）

今回のSOSU（2015）改革の背景には①高度化・複雑化する介護・保健ニーズに対応するため質的向上を図ること②自治体の財政軽減を図ること③学生の学習目的を明確にする等が考えられる。

介護専門職の養成として、これまで①社会保健ヘルパー（SSH）：1年2か月の養成期間を要する業務は老人或いは障がい者施設等のヘルパーで医療行為は行わない。②社会保健アシスタント（SSA）：この資格を取得するためには社会保健ヘルパーの資格取得後進学するようになっており、養成期間は1年8か月となっていた。この資格の業務は高齢者の在宅支援或いは病院等での介護行為において基礎的医療行為を行う。すなわち、介護サービス行為上療養処置（人工呼吸器使用者の吸引、薬剤の調合、静脈注射等）が必要な場合適切に行うことができる。尚、両資格共に入学年齢は18歳以上となっており、海外からの移民が資格並びに就業において有利に働くので入学を希望する割合が高くなっている。その理由

はSOSUに入学すると同時に自治体職員に登録され職場が保障されていたこと並びに自治体職員として毎月給料が保障されたので経済的・雇用条件共に有利であるから。ただし、デンマーク語を必ず取得しなければならないので移民にとって、資格取得は容易ではなかった。

尚、図表－8の通り介護専門職等の品質は、日本の場合と異なり自治体が保証している（ネストヴェズ市の場合）。



図表－8 品質についての考え方
（出典:デンマーク、ネストヴェズの基本情報）

しかし、2015年のSOSU（社会・健康スクール）の改革により、以下の点について変更された。すなわち、入試改革においてケア・健康教育スクールに入学する学生は、①国民学校の受験生は必ずデンマーク語と数学に合格することが条件となる。②学校に入学した者（社会人を含む）はいきなり自治体職員として登録・採用するのではなく、入学後の成績等を考慮して採用される③SSHコースの総時間数が1,680時間から1,860時間増加（実習が240時間増加）④SSAの総時間数が2,310時間から1,950時間に減少（実習と講義が減少）⑤2017年より、18歳で直接SSAに入学することができるようになった。この2015年のSOSU改革の目的は①学校と現場実習との関係を緊密にすること②優秀な専門職員を労働市場に送り出すこと③養成期間を2年から5年に延長し、高度な教育を受けた優秀な職員の養成を図る等である。以上、教育制度改革（国民学校改革、職業教育改革）について検討してきた。小国でありながら「生活大国」であり「世界一幸せな国」であるデンマークが、今回大胆な教育改革を試みたが、その目的は何であろうか。新自由主義経済と経済のグローバル化の影響のもとで「学力第一主義」、「点数主義」に舵を切るのか或いはグルントヴィ思想の流れを汲んだ北欧の教育界のリーダーとして成熟した教育制度（自由と平等）を維持するのかその動向が注目されること

ろである。

[引用文献]

- (1) 清水 満『生のための学校』新評論1996(新版) p97
- (2) オーヴェ・コースゴー著、清水 満訳『政治思想家としてのグルントヴィ』新評論2016p78
- (3) 同上(1) p100
- (4) 小池直人訳「グルントヴィ小伝—時代と思想ポール・ダム」SFCN discussion paper(名古屋大学社会文化形成研究会ディスカッションペーパー) No.14-1 2014年4月8日発行 p16
- (5) 同上(2) p53
- (6) 同上(2) p62
- (7) 小池直人『デンマーク共同社会の歴史と思想』大月書店2017p201
- (8) 同上(7) p201
- (9) グルントヴィ著・小池直人訳『ホイスコーレ上』風媒社 2014p27
- (10) 同上(2) p30
- (11) K・ハストロブ編、菅原邦城・熊野聡・田辺欧・清水育男訳『北欧のアイデンティティ』東海大学出版会1996p4
- (12) 成清美治『私たちの社会福祉』学文社2012 p36
- (13) 同上(2) p61
- (14) 仲村優一・一番ヶ瀬康子編集委員会代表『世界の社会福祉—デンマーク・ノルウェー』旬報社1999p148
- (15) 上記(7)のp49
- (16) 同上(7) p2
- (17) 谷雅泰・青木真理編著『転換期と向き合うデンマークの教育』ひとなる書房2017p31
- (18) 谷雅泰「デンマークの教育改革—2014年国民学校法改正と2015年の職業教育改革—」人間発達文化学類論集 第22号 p54-55 2016年3月
- (19) 同上(18) p179

[参考文献]

- ・橋本淳編『デンマークの歴史』創元社2004 第1版第6刷発行
- ・浅野 仁・牧野正憲・平林孝行裕編『デンマークの歴史・文化・社会』創元社2010年第1版第3刷発行
- ・成清美治「デンマークの社会福祉事情」総合社会

福祉研究 第11号1997

- ・成清美治「デンマークの高齢者福祉の現状と課題」神戸親和女子大学大学院研究紀要 第10巻2014
- ・成清美治「デンマークのケアスタッフ養成教育に関する現状と課題」神戸親和女子大学大学院研究紀要 第11巻2015
- ・成清美治「地域包括ケアシステムと介護人材の養成—デンマークとフィンランドを参考にして」神戸親和女子大学大学院研究紀要 第12巻 2016
- ・翁百合・西沢和彦・山田久・湯元健治『北欧モデル—何が政策イノベーションを生み出すのか』日本経済新聞出版社2012
- ・オーヴェ・コースゴー著／清水満訳『政治思想家としてのグルントヴィ』新評論2016